



ぶらり相生第29号  
平成30年8月

### 「相生を詠んだ野口雨情」

相高の夏季休業も後半に入る時期になります。8月20日からは、後期補習が開始されます。8月21日（火）・22日（水）両日は、オープンハイスクールが予定されています。

さて、野口雨情<sup>うじょう</sup>という人物をご存じでしょうか。主に大正・昭和期に活躍した詩人、童謡・民謡作詞家で、北原白秋、西條八十<sup>うた</sup>とともに、童謡界の三大詩人と謳われました。

「十五夜お月さん」「青い目のお人形」「枯すすき」「波浮の港」などで広く民衆に愛唱されました。

その野口雨情の詩碑が、相生市那波南本町の中央公園にあります。歌詞は全部で十五節あり、詩碑に刻んでいるのは、そのうちの三節と最後の十五節。書は雨情直筆といわれています。

野口雨情は、東京専門学校（現早稲田大学）英文科に入学して、坪内逍遙に師事し、小川未明らを友とし、三木露風・相馬御風らと早稲田詩社を起し新民謡を志しました。明治40（1907）年、北海道に渡り、石川啄木と出会いました。

その野口雨情は、相生商工会に「相生小唄」の作詞を依頼され、昭和11（1936）年4月、相生を訪れ、『播磨港ふし』を作詩しました。



『播磨港ふし』の十五節は、以下の通りです。

1. ついちゃゆかれず涙で送る相生は出船の辛いところ
2. 啼いて夜ふけに千鳥が渡る沖の唐島月明り
3. 相生の港はなつかし港軒の下まで船がつく
4. 相生と那波とは川一筋の切って切れない町つづき
5. 義士で名高い大石さまの今に残るは下屋敷
6. 櫻花咲きや天神山にうすらおぼろの夜がつづく
7. 那波の大島椿の花は春の櫻の中に咲く
8. 相生の町中夜明けの知らせ魚市場の螺が鳴る
9. 鐵のひゞきに港は榮え國のまもりの船つくる
10. 播磨灘にも遠見の山の梅の花から春が来る
11. 忘れなざるな山陽線的那波と相生とは軒つづき
12. 播磨ゆうなぎ灘さえ静か港々はゆう焼ける
13. 思ひ思ひに白帆をかけて船は遥の沖をゆく
14. 波のしぶきに鷗でさえもぬれて港の沖に啼く
15. 雲の蔭から雨ふり月は浜の小舟の中のぞく